

# こらっせ便り



2018年6月11日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

## 「プログラム」には学びとチームワークが大事 「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局長 遠野はるひ

賛同してくださるみなさまのおかげで、8月6日から8日まで「神奈川リフレッシュプログラム」を実施することができます。今年のプログラム内容は例年と変わりませんが、去年は交通渋滞のために帰宅時間が遅くなったことに加え、財政難もあり高額な観光バスに代え列車を使うことにしました。

大学生との実行委員会も3月にスタートしました。実行委員会では学習会を行い福島のことを学んでいます。短期間でも子どもだけを預かるのは責任重大。実行委員会・学習会は、スタッフがチームワークを作る場ともなっています。

3月末の第1回実行委員会では福島からひまわり大使を迎えましたが、その後、交流している山北町三保小学校の子どもたちが校庭にひまわりを植えてくれました。キックオフミーティングでは、「こらっせユース」OBの石渡博之さんの講演から「人のために生きること」や「お財布を使わないでも暮らせる生活」について知りました。次回の学習会では、阿部知子衆議院議員を迎え、何度も福島を訪れているその深い経験と医師としての立場から、甲状腺などの健康問題を中心に話していただく予定です。

「こらっせ」も他の団体と同様、年々財政が厳しくなっています。「フクシマ忘れない」ためにもこのプログラムを継続します。ご支援をよろしくお願いいたします。

### 2018年度 神奈川リフレッシュプログラム（仮）

日時		場所	プログラム
8月6日（月）	午前	いわき駅集合（AM8:30） 連絡など いわき駅出発（AM9:20）	いわき駅（特急ひたち）－東京駅 －小田原駅（特急踊り子） 小田原駅－丹沢荘（山北町バス）
	昼 午後 夜	山北町丹沢荘着 丹沢荘泊	車中で昼食 オリエンテーション＋遊び ウェルカムパーティ/花火大会など
8月7日（火）	午前		朝食 イベント（企画中）
	昼 午後 夜	丹沢荘泊	昼食 川遊び バーベキュー→キャンプファイヤー
8月8日（水）	午前	丹沢荘出発（AM8:30） 横浜みなとみらい到着	朝食/横浜みなとみらいへ（山北町バス） グループで散策・遊び・ショッピング
	昼 午後	みなとみらい周辺 桜木町駅出発（PM4:00）	グループで昼食 散策・遊び・ショッピング
	夜	いわき駅到着（PM7:15）解散	桜木町駅（JR京浜東北線） －品川駅－いわき駅（特急ひたち）

# － キックオフ講演会報告 － 自分の生き方を考え陸前高田に移住 石渡博之さん（SET コーディネーター）

5月6日（日）かながわ県民活動サポートセンターで、2018年度「神奈川リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が行われました。約50人が集まり講師の話や学生の報告を熱心に聞きました。

最初にあいさつに立った山際正道代表は「今年は7年目となります。楢葉町での学童支援も軌道に乗ってきました。私たちは子どもの成長を願い支援を進めます。夏の『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」と述べました。

このあと「こらっせ」の活動に学生スタッフ（「こらっせユース」）として関わり、卒業後に東日本大震災の被災地・岩手県陸前高田市のNPOであるSETでスタッフとして活動している石渡博之さんから「陸前高田になぜ移住したのか」と題する講演がありました。陸前高田市は、中心部の大半が津波に被災、「奇跡の一本松」で有名になったこともあり、ご存じの方も多と思います。かさ上げ工事が進み店舗や住宅が建ち始めました。石渡さんは、中心部から車で30分かかる半島にある漁業が盛んな同市広田町で活動しています。石渡さんの講演の概要です。

## 年間1000人の大学生が参加

僕は大学1、2年生の時にこらっせのプログラムに参加しました。2年生になる直前に岩手県陸前高田市広田町で行われていたSET主催の1週間の大学生向けのプログラムに初めて参加、その後の大学時代の大半はSETに関わっていました。僕は教員を目指していましたが、SETに参加して自分の生き方を考えるようになり、卒業後にNPO法人となったSETに加わりました。現在は町の人達と大学生をつなぐコーディネーターとして活動しています。



陸前高田市広田町の人口は約3000人、半分が高齢者です。SETは東日本大震災の被災地支援で当時の大学生が始めました。圧倒的な被災の現実と絶望感を受けたのですが、町の人達の気持ちを受けて、広田町を残すことと都会の大学生に参加してもらい自分の生き方を考える場と位置づけ活動が続けてきました。代表の三井俊介は3年前の市議選に立候補しトップ当選しました。地縁、血縁もないなかで町を変えたいという思いが届いたのだと思います。

広田町は、海がきれいで古民家が並んでいます。人のつながりをとても大事にする町です。でも50年後にはなくなるかもしれないのです。過疎で働くところがなく、若者は都会に出て行ってしまふからです。僕と同じ世代は5人しかいません。ワカメ漁も漁業も担う若者が少ないのが現状です。

人口減少は衰退とかマイナスのイメージが多いのですが、SETは人が少ないからこそ豊かな社会を作れるのではないかと考えています。活動は大学生にフォーカスしています。大学生に広田町

に来て地元の人と街づくりをする中で、自分の生き方を考えるという課題を解決していったらと考えています。

大学生が1週間滞在する地域おこしの実践プログラムは、この春で32期（僕が最初に参加したのは第3期です）になりました。1回に120-130人、年間1000人受け入れています。また、昨年10月には4ヶ月間、滞在して「やりたいことにとことん挑戦する「移住留学プログラム」を開校しました。語学を学びたい人が海外留学するように「やりたいことを実現するなら広田町へ」というのがコンセプトです。

このほか、中高生の修学旅行を受け入れるために民泊を誘致するとか、広田町の中高生に自分の生き方を考えるプログラムもやっています。東京の大学の受検案内など人生の選択肢を広げるキャリア教育プログラムです。代表の三井が中心になって「空き家バンク」も立ち上げています。僕が関わったのですが、古民家に眠っていた絵を見つけました。畠山孝一さんという80過ぎの方で、岩の絵を描いていました。大迫力の絵です。大学生が来る時に一日美術館をやろうと提案、このことが契機になって恒常的な美術館「三陸館」の開設に結びつきました。

## 漁師になりたい

僕が移住を決意したのは1週間のプログラムに参加、町のこれからのことや社会のことなどを考えていく中で、今誰のためにやっているのかということのを大事にして生きようと考えたからです。親に話したら「まともなところに就職しろ」とか「1年就職してからやったら」と言われ「新卒でやりたい」と言ったら「では家を出て行きなさい」と言われました。

移住して生活していけるのか、とよく聞かれるのですが、野菜はほとんど買ったことがありません。おすそ分けが多いです。ですからお金はほとんど使いません。1カ月に一度も財布を開けなかったこともあります。現在、漁師の手伝いをしています。漁師になりたいという思いは強いのですが、でもなり手がいないからやるのではなく、漁業が続けられる仕組みを作りたいと考えています。たとえば気仙沼ではやっていますが、行政との連携です。

石渡さんの講演の後、フロアからの質問・意見を受けました。広田町の様子や移住の動機など多くの質問がありました。また、実際にSETのプログラムに参加した学生からも発言がありました。

## 「こらっせユース」も報告

「こらっせユース」の大学生が報告しました。坪井香澄さん、古屋結麻さん、内海克也さんが昨年夏に山北町で2泊3日で行った「リフレッシュプログラム」について、写真などで詳しく説明をしました。また、加藤柚菜さん、熊谷健太さんが、春休みに2度行った学生による檜葉町での学童保育支援の様子を報告しました。どちらの報告も子どもたちに対する気持ちがよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。会場からは「こらっせの活動についてどう思うか」、「何が役に立っているのか」などの質問も出て、和気あいあいとしたムードの中で報告会は終了しました。



## 「神奈川県内の甲状腺エコー検査」でミニシンポを開催

# 経験の共有化を確認しあう

事務局 錦織順子



6月5日、神奈川県民サポートセンターで「神奈川県内の甲状腺エコー検査から見えてくるもの」と題するミニシンポジウムを「こらっせ」主催で開催しました。神奈川県内で独自にエコー検診を行っている「パルシステム神奈川ゆめコープ」の古賀匡さん、「生活クラブ生活協同組合」副理事長の桜井薫さん、「甲状腺エコー検診神奈川の会」の水澤靖子さんからそれぞれ報告をしていただき、参加者で討論しました。

「パルシステム」と「生活クラブ」は検診を希望する組合員、「神奈川の会」は公募という形で実施しています。それぞれの検診結果のデータも蓄積しています。とても貴重な報告でした。しかし、これまで特に意見交換も行われてこなかったこともあり、今後、連絡を取り合い、経験を共有化していくことを確認しました。

## 子供たちの健康確保のために

「こらっせ」は東日本大震災・福島第一原発事故翌年の2012年から福島の子どもたちの「保養活動」を行ってきました。また、2015年からはいわき市や楡葉町で、大学生による「学童への支援」を行っています。福島の子ども達とつながっていくなかで甲状腺がん発症の不安という課題に向き合わざるを得なくなり、昨年秋から取り組みを行ってきました。

2017年10月の「福島県民健康調査検討委員会」の発表では、子供の甲状腺がんの発症が193名に及ぶとされています。しかしこの数字は正しく集約されているのか疑問の声も出ています。また、福島県の見解は、「福島原発事故に起因するとは認められない」とされています。さらに、「過剰検診」や「甲状腺がんはさほど心配ない」といった医師の声が強まっているのが現状です。私たちは福島の子どもたちが健康で健やかに育つための支援を続けてきましたが、その観点からすると甲状腺がんに対する子どもたちや父母の不安を解消することが求められていると考えています。

私たちとしては福島の子どもたちには、学校を活用して必ず検診を受ける体制づくりや、生涯いつでもどこでも観察・治療・療養が受けられるような「放射線健康管理手帳」（仮称）を交付することも必要ではないかと考えています。今回のミニシンポジウムを契機に取り組みを強めていきたいと思います。次号以降も報告していきます。